

今二上山に居る鳥① ウソ (鶯)



二上山の遊歩道や山麓の桜並木の下を通っていると、「フィー、フィー」と口笛のような鳴き声が聴こえます。見上げると梢に10羽前後の小鳥がサクラの芽をついばんでいます。ウソです。スズメ目アトリ科の小鳥で、国内を移動する漂鳥(ひょうちょう)。冬、暖かい地方や低山で暮らします。

写真のように美しく、鳴き声も哀調をおびて可愛いので、私たちが小学生だった頃は小鳥屋でも売っていました。

めでたい鳥とされてもいますが、サクラやウメの花芽を食べるので、サクラやウメの名所とか栽培地では嫌われ者です。

↑雄↓雌 いずれも二上山で澤木さん撮影 もう40年くらい前でしょうか、

菟田野町(現宇陀市)宇賀志の青蓮寺近くで子どもたちが幾羽ものウソを籠に入れて、山から下りてくるのに会いました。多分かすみ網で捕まえたのでしょう。

まだウソの捕獲や売買は大目に見られていたのです。

種名は鳴き声によるとの説が有力。古語で口笛のことを「うそ」と言ったからとされています。

右の写真は友田健太郎さんが写したもので亜種の「アカウソ」。こちらは冬季日本に渡ってくる渡り鳥です。



アカウソ↑

今、二上山に居る鳥② ジョウビタキ(蔚鶉・スズメ目ヒタキ科)

この鳥は冬鳥ですから、もうすぐ居なくなります。スズメく 二上山麓で澤木さん撮影
らしいの大きさと身近な鳥です。私は小さい頃、父親に「紋付き」の名で教わりました。羽根にある白い斑紋がネーミングの由来ですが、日本各地で「モンツキ」の名で知られているようです。

種名のヒタキは、火打石を叩く音に似たカッ、カッとかヒッ、ヒッとか鳴くからと言い、蔚(じょう)は頭が灰(白)色だからだと書いてあります。広辞苑で蔚を引くと「能で老翁を言う」「炭火の白い灰になったもの」と有りますから、やっとな得した次第です。

葛城市の登山口・初田川公園や人家の近くで見かけます。



初めて知った「二上の覗き」

2月のある日、某鉄道会社の宣伝部門の人達と二上山中腹で遇った。「当麻寺の全景が俯瞰できる場所」に案内して欲しいとのこと。この日は残念ながら彼らの思うような写真は撮れなかった。後日東京からメールが届き「二上の覗きという場所に連れて行ってほしい」と言う。



恥ずかしいことに、私はこの

「二上の覗き」という言葉を始めて聞いた。というより誰かが山上ヶ岳の「覗き」になぞらえて、この山のどこかを勝手にそう呼んでいるのだと思ったのだ。しかし念のためネットで検索すると、この呼称とその地図が出てきたのである。それは私たちが時々訪れる岩壁の上であった。

それでもまだ半信半疑で、翌日登山口で会ったTさんに訊いてみた。Tさんは二上山登山の大先輩なのだ。そのTさんの答えは「あそこは昔からそう呼ばれており、修行の場だったそうだ」。私は自らの浅学を恥じた。後日東京から来た一行を澤木さんと案内して、彼ら念願の写真が撮影できたのだった。

右上の写真は、その時沢木さんが撮った当麻寺の俯瞰写真である。

ちなみに、「二上の覗き」とは祐泉寺の下から北の斜面を6～7分登ったところにある岩壁のことで、二上山登山者にはよく知られている場所である。

健生会友の会主催の講座 案内

○連続講座「地域の歴史を学ぶ～大和中世史③」——「春日若宮のおん祭と六方衆」

3月24日(日)午後2時～ 健生荘2階 講師 吉井敏幸天理大学教授

中世史④4月28日 同⑤5月19日 同⑥6月23日 同⑦7月21日

会場、場所は同じ 講師はいずれも吉井敏幸教授

○「地域の歴史を学ぶ 特別講義」 「インダス文明はなぜ急速に滅んだのか」(仮題)

8月25日 時間と場所は同上 講師 長友恒人 奈良教育大学学長

○登山の基礎とセルフレスキュー(山歩きク主催) 講師 道中純一山歩きクラブ会員

4月18日午後2時～ 健生荘2階 7月6日にも行います。

○「楽しくランニング」 講師 稲垣水美 土庫病院医師・ランナー

6月22日 午後 健生荘2階

※土庫病院友の会山歩きクラブ 総会

3月23日 午後1時から 健生荘2階。 ストレッチの実演・講義あり 以上